
つくも神

杜若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つくも神

【Nコード】

N7619B

【作者名】

杜若

【あらすじ】

警備員のバイトを始めた主人公都心のビルに潜む怪にであう

(前書き)

世にも奇妙な物語 のような世界を書きたくて
挑戦しました

時計の2本の針がびたり、と重なった。

「じゃあ、巡回いってきます」

俺は懐中電灯を手になち上がった。

「足元に気をつけて。独り言は無視するんだぞ」

眠気覚ましなのか、膝の屈伸運動をしながら

武井さんは言った。

髪が真っ白だから60を越しているかと思ったが
動作をみると、もう少し若いかもしれない。

俺は「はい」と“いい返事”をし、武井さんが笑顔で
頷くのを確認して警備員室を出た。

大学最後の春休みを利用しての短期バイトだから
人間関係などあまり考えなくてもよさそうなものだが
それでも、「ビル警備員」という、夜間勤務・少人数・少々の危険
あり

という職場では、よい関係を築いていたほうがいい。
実を言うと、武井さんと初めて顔を合わせた時、髪の色と
ちょっとガンコそうな顔つきに、少々不安になった。

「いまどきの若者」の象徴として勤務時間中

永延と愚痴と説教を垂れ流されたらどうしようと思
ったからだが、それは結局杞憂に終わった。

武井さんは「よい意味」での無関心さで俺に接してくれた。

気候の話くらいはするが、それ以外の会話はほぼ必要事項だけだ。
よって、俺はわりと快適に勤務時間をすごすことができる。

「あと一週間」

懐中電灯の明かりを頼りに廊下を歩きながら、おれは頭の中で残
りのバイトの日数と
懐に入る金を計算した。

「10万以上になるかなあ」

自然に口元がゆるむのを感じる。

時給の割には楽な仕事だ。このビルは一昨年都心再開発事業の一環として建てられた

高層ビル群のオフィス専門フロアで、メディアでよく名前の上がる企業ばかりが

入っている。残業があっても10時には完全に無人となるフロアを、翌日の就業時間までに2回見回り、あとは部屋で待機だ。

ここ2週間にあったことといえば、OLが忘れ物を取りに来たことと、飲食店フロアと

間違えて酔っ払いのカップルが迷い込んできたくらい。

泥棒と鉢合わせして殉職。などはテレビの中だけの話のようだ。

真っ暗なオフィスを一つ一つ、エアコンの消し忘れがないか覗いて確認する。

武井さんの話では、以前はタバコの火の不始末が結構あったらしいがビルが全面禁煙となってからは、その心配もない。

懐中電灯の丸い光が、整然と並んだコンピューターの上を

虫のように飛び回る。学校もそうだが、大勢の人がいて当然の場所というのが無人になると、どうしてこう不気味なのだろう。

まるで、よどんだ水のたまった水槽のようだ。

「来年から、おれもこういう場所で働くんだよな」

このバイトを始めるちよつと前に、俺は一応知名度がある会社から内定通知を貰った。親はこれで安心ね、と喜んだが

首輪みたいなネクタイをつけて、窮屈なスーツに包まれて

一生この水槽みたいな部屋で働くのか、と思うと

肩に鉛が乗ったようなこりを感じる。

「……でしょ。思ったとおり」

唐突に聞えた声に、俺ははっと我に帰った。

慌てて耳を澄まど、シーンとした静寂だけが返ってくる。

「……空耳か」

わざわざ俺は声に出して確認した。

制服の奥で心臓が下手くそなタップダンスを踊っている。

昼間にホラー映画なんか見たせいだ。

俺は自分に言い聞かせる。

ここは、山奥の村でも、廃校でもなく、都心の一等地

このフロアは無人で暗闇に沈んでいても、すぐ下のフロアでは午前2時までレストランが開いている。

こんな場所に幽霊なんかでるわけがない。

「……だから、こんな場所に移るのは反対だったのよ」

又聞いた。今度ははっきりと。若い女性がしゃべってる。

「だ、誰かいるんですか」

震える声で、俺は聞いた。

落ち着け、落ち着け、と念仏のように唱えても、足ががくがくとする不審者を見つけたら、すぐに警備員室に連絡を入れて、

頭の中をマニュアルが駆け巡る。

懐中電灯の丸い灯は、殺虫剤をかけられたゴキブリのようにむちゃくちゃ

軌跡を描いて部屋のあちこちを照らした。

返事は、ない。誰かいる様子もない。

おれは恐る恐る廊下に出てみた。

遠くにぽつんと非常口の白々としたライトが見えるが

人影は皆無だ。隠れる場所もない。

なのに、なのに

聞えるのだ。何を言っているのかは分からないが、さっきの若い女性の声に

くわえて、中年の男の声、まだ舌足らずの幼児の声、しわがれた老人の声

5人以上の人間が話してる。

「だ、だれだ、どこにいる」

俺は右に左に、懐中電灯を振り回した。

と、ドアの横、会社名がかかっているプレートを光の輪がとらえ、同時に俺の目も釘付けになった。

つやを抑えた銀色のプレート、そこに黒字で書かれた会社名そのしたに、紛れもない小さな唇がうかんでいる。

すどん、と視線が下がった。

ああ、これが腰を抜かすということか。

妙に冷静に俺は考えていた。

「そうかい、お前さんあれを見たのかい」

のんびりとさえ聞える口調で、武井さんは言いながら俺にコーヒーを入れた紙コップを渡してくれた。

「な、なんなんです。あれは」

おれはつかえつかえ聞いた、からからの喉に言葉が引っかかってうまく出てこない。

どのくらい俺はへたり込んでいたのだろう。

時計の針は二時をさしていた。

武井さんが心配して見に来てくれなかったら、朝までへたり込んでいたかもしれない。

「つくも神ってしているか？」

じぶんも紙コップを持って俺の前に腰を下ろしながら、武井さんは聞いた。

俺が首を振ると、武井さんはそうだろうなあ、と苦笑する。

「古くなった道具がなる妖怪のことさ。お椀に手足が生えたり、鍋釜が顔の人間の絵を

見たことないか？」

そういえば、社会の教科書にそんな絵が載っていた気がする。

「あ、あれがつくも神だというんですか」

「本当かどうかはしらねえよ。ただ俺はそう信じている。会社も人が作った道具みたいなもんだからな。

しかも、一人じゃない。大勢の人間がその中で働いてんだ」

「でも、ここは都心の一等地で、今は21世紀で」

俺の言葉に、武井さんの苦笑が深くなった。

「あんた、自分が見たものが信じられないのか」

「・・・信じられません」

俺の言葉に武井さんは、さらに苦笑を深くする。

「まあ、無理もないさ。あんたは運が悪い。こんな経験をするのはめったにない。

あんたは多分波長があっただろう。まあ、慣れれば気にならなくなる」

おれは千切れそうなほど首を振った。

冗談じゃない、あと一週間とはいえあの声を毎日聞かされたらおかしくなる。

そんな声なのだ。人間のようにいて人間とはどこかが完全に異なっていた。

「おれ、今日でやめさせてもらいます」

武井さんは頷いた。しょうがない、何回もあったことだ。

と顔にはつきりと書いてあった。

「会社には適当に言っというてやる。そうだ、一つ教えというてやる。

会社の声は若い時から年寄りまでさまざまだが、つぶれそうな会社は皆決まってため息をつくんだ。何でかはしらんがな。だから、だれでもない

ため息が聞えたら、気をつけるんだな。来年からここのフロアにある会社に入るんだろ」

俺はもう一度首をふった。確かに俺の入社する会社はここにもオフイスがある。

でも、本社は別だ。

「きよ、今日は早退させてください。」

「ああ、かえってゆっくりと休むといい」

そそくさと制服を脱ぎながら、俺はふと考えた。

武井さんはあの声が平気なのだろうか。おれはもう二度と聞きたく

ない、あの声。

「武井さんは、平気なんですか。あんなのを聞き続けて」
俺の言葉に、武井さんの笑い方が代わった。

にやり。そう形容するのに相応しい笑みだった。

「おれ、いくつだと思う？」

「60・・・いえ、55？」

静かに、ゆっくりと武井さんは首を振った

「35だよ。やっぱり妖怪とかかわっていると生気をすいとられる
のかねえ」

そう言ってケタケタと笑う武井さんに、おれはぞっとして
失礼します、もそこそこに警備室を飛び出した。

「はあ、今日も残業。社会人って大変だ」

「ぼやかない、ぼやかない、夕飯おごってあげるから」

「え、ラッキー さすが課長」

あれから1年以上が過ぎた。

警備会社は何も言わず、バイト代の全額を払ってくれ

俺はそれをすべて酒につきこんだ。

当時つきあっていた彼女にはあきられ、ついでに振られたが

あの声を忘れるにはそれしかなかった。

夏が来て、秋が過ぎ、冬を迎えて、おれはだんだんと声のことを
忘れていった。

そして又春がめぐってきて、この都心の一等地のオフィスビルに
新社会人として再び戻ってきた時、俺の頭の中に声のことはなかつ
た。

「ほら、早く電気消して。おいてくぞー」

「まってください、課長」

オフィスの電気を消すと、部屋は暗闇に沈んだ。
まるで水槽のようだ。と俺は思う。

・・・・・・・・ふー・・・・・・・・

おれの耳元で、深く長いため息が聞えた。

慌てて振り向くと誰もいない。

「ため息が聞えたら、気をつけるんだ」

唐突に蘇る 武井さんの声。

おれは足元がゆっくりと冷たくなるのを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7619b/>

つくも神

2010年10月11日11時00分発行